

11 課

12月12日

クリスチャンと 仕事



安息日午後 12月5日

暗唱聖句

わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずですよ。(1コリント 15:58、新共同訳)

だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの勞苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである。(1コリント 15:58、口語訳)

今週の聖句

創世記 3:19、申命記 16:15、出エジプト記 25:10~30:38、
ガラテヤ 5:22~26、コヘレト 9:10、1コリント 10:31

今週のテーマ

仕事は、神が考え出されたものです。罪に墮ちる前の理想的な世界で、神はアダムとエバに、園の世話をするという務めをお与えになりました(創2:15)。創造主と同様、みかたちにかたどって造られた2人は、創造的な仕事と愛情深い奉仕に従事することになっていたのです。つまり、罪に墮ちる前の世界、罪も死も苦しみもない世界でも、人間は仕事をしなければなりません。

この「中間の時代」(理想の世界と約束された世界の間の時代)に、私たちは仕事を神の祝福の一つと見なすように招かれています。ユダヤ人の間では、すべての子どもは手に職をつけさせられました。それどころか、自分の息子に手職を教えなかった父親は、犯罪者を育てることになるだろう、と言われました。その一方で、神の子イエスは、熟練した職人として誠実に働くことで、父なる神のみ心を果たしながら多くの年月を過ごされました。たぶん、必要とされる家具や農機具をナザレの多くの人に提供したことでしょう(マコ6:3)。これもまた、すべてが将来の奉仕にイエスを備えさせる訓練でした。使徒パウロは、アキラとプリスキラと一緒にテント職人として1年半働いたとき、安息日に会堂で論じ合っていたのと同様、主の働きをしていたのです(使徒18:1~4、IIテサ3:8~12)。

私たちは今週、仕事に関するあらゆる疑問と、キリスト教教育におけるその役割について考えます。

「わたしは知った／人間にとって最も幸福なのは／喜び楽しんで一生を送ることだ、と。人だれもが飲み食いし／その労苦によって満足するのは／神の賜物だ、と」(コヘ3:12、13)。

働くという言葉は多くの意味を持っています。私たちは必要に迫られて、食卓に食べ物を並べ、請求書の支払いをし、困ったときに備えて少し貯金するために働きます。失業は、ひどい労働環境に耐えるよりもしばしば悲惨です。

仕事は、人に価値を感じさせることができます。仕事は、「あなたは何をなさっているのですか」とか、「あなたは何ですか」といった質問に対する一般的な答え方です。引退者の多くが、有給であれ、無給であれ、可能な限り長くパートタイムの仕事を続けます。仕事は、朝起きる理由を与えてくれます。十代の若者には仕事を与えてください。そうすれば、非行に走る人が1人減ります。

問1 創世記3:19を読んでください。ここでの背景は、どのようなものですか。この聖句は、仕事の(少なくともある人たちにとっての)もう一つの側面について、何と述べていますか。

罪に墮ちる前に与えられていた仕事は、墮罪のあと、急に変化しました。ここでは、仕事の別の側面に言及しています。ある人たちにとって、仕事とは、死ぬまで続く日々の骨折り、単調な苦役なのです。彼らは、健康であるうちに引退できることを願いながら、嫌悪する仕事に励みます。ほかの人たちにとって、仕事はその人の存在の中心、個人の自己証明のあらゆる源になり、人生のすべてを占めることさえあります。このような人たちは、仕事から離れると、気が減入ったり、ぼんやりしたり、何をすべきか、何を頼りにすべきかわからなくなったりするのです。引退すると、彼らは肉体的にも心理的にも壊れて、しばしば早死にすることがあります。

クリスチャンは、神のみ旨に従って働くことを身につける必要があります。仕事は単に経済的な必要以上のものです。人は単なる雇われ人ではありません。正しく理解されるなら、人の一生の仕事は、奉仕の手段、その人と主の関係のあらわれです。教師の務めの一部は、生徒たちの能力と神から与えられた彼らの関心がこの世の必要と交わるところに働きを見いだせるよう、彼らを助けることです。

職業や仕事というのは、人生において「何かをすること」と関係があります。

問2 次の聖句は、仕事（象徴として「手」を用いること）について、どのようなことを教えていますか。

申命記 16 : 15

コヘレト 9 : 10

箴言 21 : 25

エレミヤ 1 : 16

神は、私たちが満足と喜びを見いだせるように、仕事を与えてくださいました（箴 10 : 4、12 : 14 参照）。心理学において、「自己効力感」というのは、だれもが何か意義深いことを人生で成し遂げる能力があるという確信のことです。自己効力感とは、「自分ではできる！ 自分ではできる！」と繰り返し言うことで高まりはしません。実際に何かをすることでしか、自己効力感を高めることはできないのです。

仕事は私たちにとって神の祝福であり（詩編 90 : 17 参照）、それによって私たちは意義深い生活を送ることができますが、神の最終的なご計画は、仕事がほかの人たちを祝福することです。パウロは、自分の手で何か有用なことをして、私たちは働かなければならない、と書いています。その結果、私たちはほかの人に分け与えるものを得ることができるのです。パウロは確かにこの原則に従って生きました。

「ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように働いて弱者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました」（使徒 20 : 34、35）。

ネヘミヤの単純な祈りが、私たちの祈りになるべきです——「神よ、今こそわたしの手を強くしてください」（ネヘ 6 : 9）。

仕事に対するあなたの態度は、どのようなものですか。どのようにしたら、人々への祝福となるよう、あなたの仕事を用いることができますか。

問3 出エジプト記 25：10～30：38 をざっと読んでください。神がモーセに礼拝のための幕屋を建てるように求められたとき、神は細かいことにはいかにこだわっておられますか。神のご性格について、このことは何を教えていますか。

神がモーセに、「ご自分のため」の幕屋を建てるように命じられたとき、「主よ、問題ありません！ エジプトを40年前に逃げてから、私はずっとテントを張ってきたんです。ほんの少しだけ時間をください！」と、モーセは言うことができたはずですが。しかしモーセが予想していなかったことに、（それ以外の点では非常に単純な建築物のための）一連の設計図はものすごく細かく、加えて、祭服だけでなく、建築物内部の家具一つひとつに関する「作り方リスト」も長かったのです。そのリストには、1点1点について150近くの指示が含まれていました。単純な机を作るために、モーセは7段階の組み立て手順を踏まなければなりません（出25：23～30）。

神がご自分の幕屋を建てる際に（のちには、いけにえの儀式のための指示において）示された細部へのこだわりは、質の高さを求める精神、まさに傑作品を生み出したいという願いをあらわしています。材料は最高品質のもので、デザインは非の打ち所がなく、仕事は際立っていなければなりません。そのメッセージは、はっきりしていました——「神がともにおられるのだから、雑な仕事は受け入れられない！」ということです。

しかし、その基準は高いと思われましたが、神ご自身が、行動を起こすための弾みを与えるだけでなく、基準に達するための人材をも与えてくださったのです。出エジプト記 31：1～6、35：30～36：1には、神ご自身が必要な技術を人々にお授けになったと書かれています。この人たちは「神の霊を満た」され、あらゆる種類の職人技の能力と知識を与えられました。「主が命じられたとおりに」（出36：1）に、幕屋の建物と祭具とが作られていくためです。さらに、2人の主任デザイナーには「教える力」（同35：34）が授けられました。彼らの知識や技術が、イスラエルの共同体の中にとどまり続けるためです。この2人は、神によって選ばれた指導者として、物語の中で選出されていますが、ほかの人たちも同様の賜物を受け、この仕事に参加しました（同36：2）。

このように、墮落した罪深い人間であるということは、どんな務めであれ、最高とは言えない献身でそれを扱う正当な理由にはなりません。神は私たちに、いつも最善をなすこと、大いなる働きのために私たちの才能、能力、時間、教育を有効に利用することを期待しておられるのです。

「わたしたちは、靈の導きに従って生きているなら、靈の導きに従ってまた前進しましょう」(ガラ5:25)。仕事と靈性とは切り離せません。キリスト教は、人が気分を変えたり、人生の異なる段階を経るときに、脱いだり、着たりできる衣服ではありません。そうではなく、キリスト教は、仕事を含む生活のすべての面であらわれる新しい存在を生み出すのです。

問4 ガラテヤ5:22~26を読んでください。パウロが説明しているどの賜物が、あなたやあなたの仕事を説明していますか。

新約聖書の語彙ごいに関する『解説辞書』は、「靈的な人」を「生き方で靈の実をあらわす人」と説明しています。私たちはこの説明から、人間は、キリストとのつながりを通して、生活のあらゆる面において信者としての役割を果たすのだ、と結論づけることができるかもしれません。

フロリダ病院〔現アドベントヘルス・オーランド〕で1人の男性患者が死の床にあり、親友がベッドのそばでずっと付き添っていました。看護師たちが病室を出たり入ったりしては、患者の必要に応じてゆきます。会話を続けようとして、その友人は看護師たちに、どこで訓練を受けたのか、と尋ねました。彼らの多くが、フロリダ病院大学〔現アドベントヘルス大学〕で教育を受けた、と答えました。

そのことは、この友人に大きな感銘を与えました。そこで彼は、フロリダ病院大学がどういうところなのかを見ようと、その後何度か大学を訪問したのです。なぜでしょうか。なぜなら彼は、この学校で訓練を受けた看護師たちは、ほかの所で訓練を受けた看護師たちより、死の床にある彼の友人に、優しく愛情のこもった世話を絶えずしてくれるように見える、と周りの人たちに語っていたからでした。つまり彼は、死の床にある友人に対する態度について、彼らとほかの看護師たちとの間に大きな違いを認めることができたのです。

こうして、彼はこの大学とその使命についていろいろ質問し、最終的に、彼が現場で見たような看護師たちをもっと教育してもらうために、1000万円の寄付をしました。確かに、靈性とは生き方なのです。

あなたの生活の日々の働きの中で、あなたはどのように靈性をあらわしていますか。どのような印象を周囲に与えていると思いますか（なぜなら、結局のところ、あなたは何らかの印象を与えてしまうからです）。

「何によらず手をつけたことは熱心にするがよい」(コヘ9:10)。最も賢い人間〔ソロモン〕が、生活のあらゆる面における管理者の務めについて、このような勧告の言葉を用いています。

クリスチャンとしての管理者の務めについて一言求められると、多くの人がクリスチャンの金銭的責任にだけ考えを限定してしまいます。確かに、金銭は管理者の務めの重要な一側面ですが、この務めを金銭にだけ限ることは、あまりにも狭すぎます。

教会において、神が私たちに授けてくださった資源とは何でしょうか。ペトロは、すべての人が創造主から授けられた賜物を持っていると明言し、そのような賜物を授かっているクリスチャンたちを「聖なる祭司」(Iペト2:5)と呼んでいます。彼らには、神から与えられたあらゆる賜物(金銭、時間、エネルギー、才能など)を管理する責任が神に対してあるのです。

問5 コヘレト9:10、Iコリント10:31を読んでください。私たちはいかに働くべきか、働くことをいかに人々に教えるべきかということについて、先の聖句の中には、どのようなメッセージがありますか。

現代生活の陥りやすい落とし穴の一つは、生活のさまざまな側面を区分けする傾向です。労働生活、家庭生活、霊的生活、さらには余暇生活というものさえあります。生活のこういった領域を分け、それぞれの間に重なる部分がほとんど、あるいはまったくないという傾向は、ある場合には望まれることです。例えば、家庭の責任の妨げになるので、仕事を家に持ち込むのはよくないとか、余暇を求めることで神と交わる時間を短くすべきでないとか……。

しかし、そのような制限は、私たちの全存在の中で果たさなければならぬ霊的生活の役割に適用すべきではありません。クリスチャンの仕事は、神と交わり、神とともに働くことから生じます。仕事は、それによって私たちが神のご臨在を実践できる一つの方法です。私たちの宗教生活を区分けすること、神を1日、1時間、あるいは生活の一つの領域にだけ限ることは、こういったほかの領域に神がまさに存在されることを認めないことです。

二つ質問があります。第一に、あなたが霊的生活を区分けしているかどうか、自問してください。第二に、もしそうしているなら、あなたがしているすべてのことの中で、どうしたら霊性を第一にすることができるでしょうか。

参考資料として、創世記3章、コヘレト2:18～23、エフェソ6:5～8、『人類のあけぼの』第4章「エデンの園の悲劇」を読んでください。

仕事は、呪いでしょうか、それとも祝福でしょうか。仕事は、罪の呪いの一部になったかのようです（創3:17）。しかしじっくり読むと、呪われたのは土であって、仕事でないことがわかります。神はこの職務が祝福となるように意図されたのだと、エレン・G・ホワイトは述べています。「このとき以来、^{かんなん}艱難^{しんく}辛苦の生活が人間の運命になったが、これは、愛のゆえに定められたものであった。これは罪の結果、人間に必要となった訓練であって、食欲と情欲の放縱を防ぎ、克己の習慣を発達させるためであった。これは、罪の滅びと墮落から人間を回復する神の大計画の一部であった」（『希望への光』31ページ、『人類のあけぼの』上巻49ページ）。

ひょっとすると私たちは、単調さ、働きすぎ、あるいは生活の中における仕事の役割の過大評価によって、仕事を呪いにしてきたでしょうか。私たちの状況がどうであれ、正しい視点から仕事を捉えることを身につけなければなりません。そしてキリスト教教育は、人々が仕事の価値を学ぶ手助けをすると同時に、仕事によって偶像を生み出さないようにする必要があります。

話し合いのための質問

- ① 私たちは仕事を通して家族の世話をし、家族を養います。どうしたら私たちは、仕事に関する肯定的な態度を家族に伝えることができますか。
- ② すばらしい仕事をする事と、仕事中毒になることとは、時として紙一重です。どうしたら私たちは、その一線を越えずにいられるでしょうか（コヘ2:23参照）。
- ③ パウロは、はっきり述べています——「実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、『働きたくない者は、食べてはならない』と命じていました」（Ⅱテサ3:10）。言うまでもなく、この原則は極めて道理にかなっています。しかし、この原則が当てはまらない例には、どのようなものがあるでしょうか。つまり、なぜ私たちはこれを、決して破ってはならない鉄則にしないよう、気をつけなければならないのですか。